さまざまな諸問題は「通底している」

NPO法人KENTO
代表理事　児島早苗

皆様こんにちは。奈良県のNPO法人KENTO（ケント）代表の児島早苗と申します。2000年5月15日、18才の長男が自宅近くで交通事件（※）に遭い、同月29日に息を引き取りました。その後23年間交通事件ゼロ目指し一歩一歩活動を継続しています。

この場をお借りし何かお伝え出来れば有り難く最善を尽くしてみます。

暮らしの中で人の死が関わる事件が起きると、メディアを通し被害者遺族から聞かれる言葉は『何があったのか本当のことが知りたい！』『二度と同じことが起きて欲しくない！』ではないでしょうか。地域や国を超えこの願いはほぼ共通します。人類全体の中に組み込まれた悲しみを繰り返さない為、より良い改善への希求が共有DNAとして存在している、そう感じずにおれません。

真相を求め息子の仲間達と立ち上がり動き始めてから、普通に暮らしていた時には気づかなかった、知り得なかったことや世の中の仕組みが少しずつ見え始めました。相手ドライバーの所属先が日本最大の運送企業であった為、一国民の私達は全てにおいて赤子同然の立ち位置でした。もの言えぬ死者に非を負わせ、死者に口無し・人権無しのシナリオが直後よりすでに動き出し、それを知る術も無く、息子と生死の闘いを続けていました。

葬儀後、真相究明に立ち上がると警察署は『捜査中で話せない』との説明を繰り返しました。違和感を覚え同時に何か変だと不安が増しました。そこで遺族仲間・相談弁護士の方々からのアドバイスを基に自分達の現場検証及び署名活動を開始しました。百戦錬磨のプロ達に対し、赤子のままでは同じ土俵に上れません。署名では公平な捜査と正式起訴を求めました。また自分がそうであったように何も知らないままの社会の人達にこの現実を知らせ、共に考えて貰おうと願いました。

その頃たびたび、全国で毎日繰り返し起きる交通事件の被害者遺族・家族達が『真相を何としても知りたいのですッ！』と一斉に声を大にして上げないかな、そうすれば国は動かざるを得ない、真摯に一件ずつの交通事件にもっと素早く向き合い、科学捜査も入る。第二第三の犠牲者をストップできる、そう真剣に考えました。一気に実現が無理であっても、国を超えた情報技術の進化が個人の成熟度を高め、きっと繋がって行けると今は感じています。

公開の刑事裁判法廷の中で、『死者に人権無し』が否が応でも突き刺さって来ました。既存勢力に物申すのは大変な気力を要し、自分自身の内面の弱さとの葛藤が常にありました。しかし理不尽に命を奪われ、さらに汚名を着せられるままでは息子に一生顔向けできません。最高裁判所での被告有罪確定まで事件から七年半でした。

その間を通し交通事件がはらむ問題に気づき、今も向き合っています。はらむ問題は交通事件だけでなく、様々な犯罪事件にも、いじめや虐待や性被害、各種ハラスメント等にも共通していることに思い至ります。一個人の加害・被害の問題ではなく、法を始めとする社会の仕組みの歪みを放置しては何も解決しません。それは同類事件を繰り返し、その予備軍の増大を看過するのみとなります。

この国独自の素晴らしさは幾つもあります。だから上辺の言葉でなく、国民の命に目を向ける行動に分かり易く方向転換して貰いたい。声さえ上げられない子供達を始めとする弱者の声を聴く姿を私達国民に絶え間なく示して貰いたい。息子の命と共に私も最善を尽くしこれからも活動を続けて行きます。

※被害者遺族は“事故”でなく“事件”と考えています